

群馬県における古墳文化への取組

REPORT ON EFFORTS RELATED TO KOFUN CULTURE IN GUNMA PREFECTURE

今城 未知・白銀 三容子（群馬県文化財保護課・文化振興課）

IMAJO MICHU/SHIROGANE SAYOKO

(CULTURAL ASSETS PRESERVATION DIVISION, CULTURAL PROMOTION DIVISION)

はじめに

群馬県には東日本で最大規模の前方後円墳である史跡天神山古墳（太田市）をはじめ、古墳時代を通して注目すべき古墳が築造され、国宝埴輪武装男子立像や国宝綿貫観音山古墳出土品など、特筆すべき遺物も散見される。さらに、古墳時代に噴火した榛名山の火山灰で被災し埋没した集落跡の史跡黒井峯遺跡や「甲を着た古墳人」で有名な金井東裏遺跡など古墳時代の社会を理解する上で重要な遺跡や遺物などが豊富にあり、東国における古墳文化の一大拠点であった。

群馬県では、県内の歴史文化を県内外に発信し、県民の郷土に対する誇りと愛着を醸成するとともに、観光振興・地域振興につなげる取組として、平成24年度から「古墳総合調査」や「東国文化副読本」「古代東国古墳サミット」、VR制作、スマホアプリのリリースなど、様々な事業を行ってきた。本稿ではその事例を紹介したい。なお、執筆は1を今城が、2を白銀が担当した。

1. 古墳総合調査と情報発信

(1) 昭和10年の古墳調査

昭和10年、当時の群馬県知事の主導により、県内の古墳調査が実施された。この調査は「^{ろぼ}函簿誤導事件」により意気消沈ムードに包まれた群馬県を明るくしようと始まった県を挙げての一大プロジェクトであった。東京帝国大学黒板勝美のもと、1,593人の学校教員・郷土史家が動員され、データのとりまとめは後に群馬大学で県内の古墳の発掘調査を行うこととなる尾崎喜左雄が担当した。この調査の成果として、『上毛古墳

綜覧』が刊行された。『上毛古墳綜覧』には古墳の所在地・土地所有者・墳丘形状・現状・規模・出土遺物が細かく記載されており、その後の群馬県の古墳研究における大きな礎となった。この調査では8,243基の古墳が確認された。なお、この調査で蓄積された「古墳調査票」や古墳スケッチなどは、群馬県立文書館で保管している。

(2) 平成の群馬県古墳総合調査

昭和10年の古墳調査から約80年という長い年月が経過し、開発や発掘調査によって多くの古墳が発見された。一方で、姿を消した古墳も多く、群馬県にはどのくらいの古墳が築造され、現存しているのか、把握できていない状況であった。この実態を把握するため、平成24年から「群馬県古墳総合調査」が実施された。この調査は、現地調査4年と報告書作成1年の計5年にわたった。

調査では、主要古墳出土遺物の基礎調査、県内古墳に関する悉皆調査、古墳に関する古写真の調査、『上毛古墳綜覧』及び「古墳調査票」のデジタル化の4つの調査が設定された。また、総合的な指導・助言をいただくため、古墳や古代史の専門家からなる調査指導委員会と、県内の市町村教育委員会や公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の専門職員からなる幹事会を組織し、調査方法等に関する検討や助言を行う体制を整えた。調査にあたっては「県民が調査に参加する機会を設ける」ことをコンセプトの一つとし、ボランティアの「県民調査員」を募集した。県民調査員には、約半年間にわたって古墳に関する講座や現地実習等の研修が行われ、最終的に161人の県民調査員が登録された。県民調査員の活動は多岐にわたった。調査票の入力や分布図の作成、『上毛古墳綜覧』に掲載された

古墳の現地確認（図1）だけでなく、県内各地で実施された関連イベント（図2）の際には、展示の解説も行った。歴史への深い関心を持ち、地域の情報にも精通している県民調査員の活動と市町村教育委員会による既存の調査データの提供、現地調査への協力、作成したデータの確認など、多くの協力があったからこそ、悉皆的な調査をなし得た。

5カ年にわたる調査の結果、群馬県内には13,249基以上の古墳が築造され、そのうち約2,400基が残存していることが判明した。調査によって県内の古墳の全体像が把握され、古墳に関する基礎的な情報が蓄積されたことは、群馬県ひいては東国の古墳時代像を検討する重要な基礎資料となった。一方で『上毛古墳総覧』以降、相当数の古墳が開発等によって消滅していることも判明し、地域に残されている古墳を次世代のために保存・活用していく重要性も示された。

「古墳総合調査」の成果は『群馬県古墳総覧』として刊行した。地域の資料として活用してもらうため、県内の中学校以上の全ての学校と県及び市町村立図書館や教育委員会に配布し、一般販売も行っている。総



図1 沼田市奈良古墳群での現地調査



図2 古墳王国展での展示解説

合調査で得られた古墳の情報はデータベース化し、インターネット上での公開の準備を進めているところである。

(3) 古墳総合調査後の情報発信

—ぐんま古墳探訪—

群馬県内の古墳や古墳時代の遺跡は整備されていて見学できるものや石室に入ることができるものが多い。「古墳総合調査」をもとに、現地に訪れて古墳の魅力を感じてもらいたいという観点から、平成29年にガイドブック『ぐんま古墳探訪』、平成30年に同名のスマートフォン向けアプリをリリースした（図3）。

ガイドブックには、古墳や古墳時代の遺跡のほか、古墳時代全般についても知っていただけるように、古墳から出土した遺物が見学できる博物館・資料館や飛鳥・奈良時代の寺院も掲載している。さらに、足を運んでもらうことが大きな目的であるため、古墳や遺跡の見学可能時間や駐車場・連絡先などのアクセス情報、見学に適した時期や服装といった古墳見学に役立つ情報も盛り込んでいる。また、「甲を着た古墳人」で有名な金井東裏遺跡・金井下新田遺跡、群馬の埴輪に関する特集ページも設け、最新の調査・研究成果を紹介している。ガイドブックは県内の図書館や教育委員会、全ての学校に配布し、一般販売も行っている。ガイドブックの令和3年3月末での販売冊数は3,581冊である。県外からの問い合わせも多く、注目度の高さを実感している。

スマートフォン向けアプリでは、ガイドブックで掲載した古墳の位置情報と解説を提供している。古墳までの経路検索や各種条件検索ができ、お気に入りの古墳を登録すればマイルートが作成できる。周遊コースも設定しており、設定された古墳や施設をめぐるスタンプを集めることができるようになっている。クイズチャレンジでは、古墳の基礎知識や県内の古墳に関連する伝説を問うものもある。また、プッシュ配信機能では、県内の古墳時代に関する展示や講演会・説明会などを情報提供している。アプリのダウンロード数は現在までに約7,800件に達している。

(4) 教育現場との連携

—「古墳学習プログラム」—

群馬県では小学校6年生の社会科の授業に古墳の学習を取り入れている学校が多い。そこで、身近な古墳の価値に気づいてもらうことで子供たちの歴史や文化に関する学びを深め、郷土への誇りを醸成しようというコンセプトのもとで作られたのが、教員向けの校外学習用指導マニュアル「古墳学習プログラム」である。校外学習などで古墳を訪れた際に使用するもので、学習指導要領の小学校6年生の社会科の授業のねらいをより効果的に達成することを目的としている。

プログラムの作成にあたっては、平成30年度から作成委員会を設置した。委員会のメンバーは小学校の社会科担当教員4名と群馬県埋蔵文化財調査事業団に派遣されている教員籍の職員1名である。

委員会では県内の博物館や古墳を見学した後、委員の勤務校が所在する市町村内の古墳を活用した社会科学習指導案を検討しプログラムの原案を作成した。そして令和元年度には指導案に基づいて各委員が古墳での実践授業を行った。実践授業の場となったのは、前橋市広瀬・朝倉古墳群、高崎市史跡観音山古墳、太田市史跡天神山古墳、沼田市県史跡奈良古墳群である。

県内4カ所で行われた実践授業のうち、群馬県が管理する史跡観音山古墳で行われた授業を県内の教員と文化財担当職員を招いた公開授業とした(図4)。

公開授業では県文化財保護課職員も専門的な解説を行うゲストティーチャーとして参加した。公開授業の前には、授業を行う教員とゲストティーチャーで授業のねらいについて共通認識を持てるよう、事前の打ち

合わせを行った。授業では、生徒が複数のグループに分かれて古墳の大きさを歩いて測ったり、各地点にいるゲストティーチャーから説明を受けた。その中で、校内での事前学習や県立歴史博物館で遺物を見るなどして各自が持っていた疑問をゲストティーチャーに質問し、分かったことをグループで話し合うなどして課題を解決した。

公開授業とその後の公開授業研究会では古墳見学を学習に取り入れることの有効性や実際の授業の方法、文化財担当部局との連携方法について、教員・文化財担当部局の職員で活発な議論が行われた。

筆者もゲストティーチャーとして参加したが、普段は小学生に教える機会がなかったため、生徒の持つ疑問や視点に触れることで古墳文化を分かりやすく伝え、興味を持ってもらえるようにするためにはどのようにすればよいか考える貴重な機会となった。

そして、これらの活動を経て、令和2年3月には冊子を刊行し、県内の小学校と市町村教育委員会に配布した。プログラムには上記の県内4カ所の古墳・古墳群を活用した指導案やワークシート案、古墳観察の際の簡単なポイント、各授業で児童が実際に書いたワークシートや授業の様子を掲載している。校外学習で利用できる古墳は県内には多くあることから、より多くの古墳で授業が組めるように、かつ、社会科以外の教員も利用しやすいよう、汎用性の高いものとしている。

巻末には古墳を利用した学習に協力できる市町村教育委員会や各機関と見学可能な施設・史跡等を掲載し、学校と文化財部局の連携を高めることができるようにした。



図3 ぐんま古墳探訪と古墳学習プログラム



図4 史跡観音山古墳での公開授業

2. 古墳や遺跡などの歴史文化遺産を活用した取組

(1) 東国文化副読本の制作・活用

古墳時代の群馬県が、東国文化（古墳時代を中心に現在の関東地方で栄えた文化）の中心地であり、東日本最大の古墳大国であったことに着目し、全国に誇れる歴史文化遺産について、県民自身にその価値を再認識してもらうとともに、その魅力を全国に積極的に発信し、地域振興や観光振興につなげていく取組として「東国文化周知事業」を平成24年度から始めた。事業にあたっては、文化行政全般や美術館・博物館運営を所管していた知事部局の文化振興課が担当し、県財政が厳しい中、文化庁の文化芸術振興費補助金（平成24年度当時は「文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」、現在は「地域文化財総合活用推進事業」）等、国の補助メニューを積極的に活用して取組んできた。

初めに取組んだ事業の一つが、教育委員会と連携して東国文化について子どもたちに学んでもらい、郷土への愛着と誇りを育てていくことを目的に制作した「東国文化副読本」（図5）である。制作にあたり、歴史を本格的に学び始める中学1年生を対象として、監修を古代研究の第一人者で元群馬県文化財保護審議会委員長の松島榮治氏に依頼し、群馬県立歴史博物館、文化財保護課、義務教育課の職員をメンバーに編集を行った。

東国文化副読本は、平成25年度から毎年群馬県内すべての中学1年生に配布している。群馬県教育振興基本計画では「古代東国文化をはじめとした文化遺産を活用した学びの推進」が位置づけられており、第3期計画では令和5年度までに「副読本の活用状況100%」を達成目標として掲げている。これまでに毎年県内各地でモデル授業（図6）を行うなど副読本の授業での活用を促すとともに、毎年改訂を重ねながら延べ約15万人近くの生徒に学習する機会を提供してきた。内容は、主に古墳時代を中心に、群馬が東日本最大の古墳大国になった理由や当時の暮らし、代表的な史跡などについて、写真やイラストなどを用いてわかりやすく紹介したものである。

アンケート調査を毎年実施しており、令和2年度はコロナ禍の影響で活用率が低下したが91%の中学校が活用している。生徒へのアンケート（令和2年度で回答率は44%）では、「群馬のことに興味がわいたか」の質問に対して、「とても」「まあまあ」と回答した割合は74%、「群馬への誇りや愛着が強くなったか」の質問に対して、「はい」と回答した割合は47%であった。

令和3年度からは、学校現場における1人1台パソコンの学習環境に対応し、使いやすく、学習効果を高められるよう工夫したデジタル版「東国文化副読本」を公開した。これまでの内容に加えて、古墳や埴輪について解説した20本以上の動画を用いてわかりやすく紹介している。今後は、デジタル版副読本（図5）を活用したモデル授業の実施や活用動画の配信などにより、学校現場での活用をより進めていきたい。

また、夏休みの自由研究として、小学生から中学生を対象とした「東国文化自由研究」を実施している。平成25年度から毎年実施しており、これまでに7,000件近くの応募があった。小学生ならではの視点で埴輪について考察した研究や、海外の遺跡との比較などによる考察を行った研究など、審査員からも毎年研究内容の質が高いとの講評をいただいております。子どもたちに古墳や埴輪に対する興味を持たせ、自ら故郷の歴史



図5 東国文化副読本（上・冊子、下・デジタル版）

※デジタル版はこちら→

<https://hani-gunma.jp/2021gunmatougoku/top.html>

についての学ぶことにつなげることができていると考えている。



図6 東国文化モデル授業

(2) 古代東国文化を発信するイベント

群馬県民に広く、もっと古墳を身近に感じ、本県の古墳や埴輪について親しみを持ってもらおうと、古墳や埴輪をテーマに、平成24年度から29年度までは「古代東国文化サミット」(図7・8)として、30年度・令和元年度には「群馬古墳フェスタ」(図9)を開催し、毎年多くの来場者が訪れた。県内各地の古墳や遺跡などを会場に古代劇などのステージイベントの他、勾玉作りや埴輪作りなどの古代体験やスタンプラリーなど、古代を感じる歴史体験を子どもから大人まで楽しんでもらい、古墳に訪れる機会を作ること、古墳や埴輪などの歴史文化遺産に対する関心を高めることができたと考えている。

また、史跡上野国分寺跡(高崎市)では、地元住民とともに、平成25年度から「上野国分寺まつり」(図10)の中で天平の衣装行列や雅楽の演奏会など天平文化に触れる煌びやかなイベントを開催している。今で



図7 古代東国文化サミット・古代劇(史跡観音山古墳)



図8 古代東国文化サミット(大室古墳群)



図9 群馬古墳フェスタ(毛野国白石丘陵公園)

は、奈良時代の宮廷衣装をまとった総勢200人による行列をメインにしたイベントを開催しており、多くの来場者で賑わっている。

(3) 日本一の埴輪県・埴輪王国ぐんまの発信

国宝や国重要文化財に指定されている埴輪が全国で59件あるが、そのうちの22件が群馬県の古墳から出土したものであり、実に4割近くを占めることになる。東京国立博物館所蔵の国宝埴輪武装男子立像や、令和2年に新たに国宝となった綿貫観音山古墳出土品の中



図10 上野国分寺まつり・天平の衣装行列

には6世紀後半の東国を代表する埴輪群も含まれている。考古資料として最高の価値付けがなされているわけで、質の高い埴輪が多数出土している。そうした本県の埴輪の魅力を知ってもらいたいと、平成30年度には「HANIー1グランプリ」(図11)を実施した。アイドルグループの総選挙を参考に、市町村から推薦された埴輪100体の中から、誰でも参加できるよう、WEBやはがきなどの投票により人気の埴輪を決定するもので、結果は群馬古墳フェスタにおいて発表した。

市町村がそれぞれ自慢の埴輪にオリジナルのキャッチコピーをつけてPRして投票を呼びかけて、約2か月間に県内外から6万票近くの投票を集めるなど、非常に盛り上がった。さらに上位10体の埴輪を選抜し、人気ナンバー1の埴輪が中心となるオリジナル動画を制作するなど、投票だけでなく、結果発表後も埴輪に親しみを持たせる仕掛けを施した。

「HANIー1グランプリ」の実施を契機に、群馬県出土の埴輪200体を解説したガイドブック「HANIー一本」(図12)を制作した。埴輪研究の第一人者である群馬県立歴史博物館の右島特別館長と明治大学文学部の若狭准教授の監修のもと、学芸員が中心となって編集を行い、県内市町村の文化財担当者に協力をい



図12 HANIー一本



ただき、群馬県が誇る埴輪の中でも、“イチ推し埴輪”として200体を厳選し、様々な角度の写真を使って、その特徴をわかりやすく、ときにはゆるく解説するほか、埴輪に関する基礎知識や古墳時代の風俗などの紹介や、付録に埴輪のペーパークラフトをつけ、多くの方に手に取ってもらえるよう制作した。県内すべての小・中・高等学校や図書館などに配布するとともに、現在、一般書店で販売を行っており、令和3年3月末現在で2,600部以上販売した。

また、小さい子どもや若い人でも気軽に埴輪に触れてほしいと、埴輪について楽しく学べるアプリ「HANIーアプリ」(図13)を制作した。これは、埴輪のキャラクターにごはんをあげたり、埴輪や古墳に関するクイズで学びながら、様々な形の埴輪に育てる育成アプリで、育てた埴輪と県内32か所の博物館や本県出土の埴輪を多く収蔵している東京国立博物館へ行くことで得られる埴輪をマイ古墳に並べて、自分だけのオリジナル古墳が作れることができるというものである。埴輪のキャラクターは、粘土から生まれて5段階で成長し、最後まで育てると、本県から出土した「本



図11 HANIー1グランプリ



図13 HANIーアプリ



物」の埴輪になる。登場するキャラクターは専門学校生に制作を依頼するなど、官学連携の取組となった。令和3年3月末現在でダウンロード数も22,000件を超え、多くの方に楽しんでいただいている。

さらに、群馬県動画・放送スタジオ「tsulunots」(ツルノス)から本県出土の埴輪や古墳を学芸員や専門家が紹介する動画を県内外に配信している。

これまで埴輪関連のイベント実施の際に使用してきたロゴ「HANI」の商標登録を令和3年2月に行った(図14)。民間事業者に「HANI」の使用による商品開発などを働きかけ、令和3年3月にはHANI関連商品として8商品が開発され、発表を行った。HANI関連商品開発の働きかけを通じて、これまでのなかった民間事業者とつながることで、行政の枠に収まらない広がりを持って「日本一の埴輪県群馬」をPRしていきたいと考えている。また、こうした取組により、これまでとは異なる“埴輪ファン”を増やしていきたい。



図14 HANI ロゴの登録商標

(4) 発掘調査に基づいた古墳や遺跡のVRの制作

群馬県には「日本のポンペイ」と呼ばれる史跡黒井峯遺跡(渋川市)をはじめ、「甲を着た古墳人」が発掘された金井東裏遺跡(渋川市)、日本で初めて見つかった古墳時代の豪族居館である三ツ寺I遺跡(高崎市)など、6世紀の榛名山噴火により埋没した世界的にも希有で貴重な遺跡がある。現在は、約2mにも及ぶ軽石等で埋もれており、遺構跡を直接見ることはできない。そこで、貴重な遺跡の歴史的価値を多くの方にリアルに感じてもらうため、古墳時代当時の様子を再現したVRアプリを制作した(図15・16)。いずれのVRも、発掘調査の結果をもとに、研究者などのアドバイスを受けながら細部まで忠実に当時の様子を再

現し、制作はプロポーザル方式等により受注した歴史文化遺産のVR制作で多くの実績を持つ凸版印刷株式会社が行った。黒井峯遺跡では、当時の建物や馬の飼育の様子や人々の姿、三ツ寺I遺跡は豪族居館と周囲を囲う大規模な堀と祭祀を行う人々の様子、金井東裏遺跡は当時の人々の暮らしや榛名山噴火直前の「甲を着た古墳人」を再現した。また、榛名山噴火関連遺跡の他、本県は東日本最大の古墳県であることから、選りすぐりの古墳の中から、国宝が出土した史跡観音山古墳(高崎市)や群馬の石舞台と呼ばれている史跡観音塚古墳のVRを制作した。観音山古墳では築造当時の埴輪配列、観音塚古墳では巨石を使った石室の石組みを再現した。現地を訪れ、専用アプリを起動してスマートフォンやタブレットをかざすと、当時の姿を体験できる360°パノラマ画像を視聴することができ、再現したVRが解説とともに流れる仕様である。



図15 上：黒井峯タイムトラベル(史跡黒井峯遺跡)
下：榛名山古代遺跡タイムトラベル(金井東裏遺跡)



図16 群馬古墳タイムトラベル（史跡観音山古墳）

(5) 群馬県立歴史博物館イノベーション文化観光拠点計画の認定

令和2年8月には、「群馬県立歴史博物館イノベーション文化観光拠点計画」が文化観光拠点施設を中核とした地域における文化観光の推進に関する法律（以下「文化観光推進法」という。）に基づく初めての認定を受けた。この拠点計画では、本県の埴輪や古墳、榛名山噴火関連遺跡を世界に通用するコンテンツとして活用し、県立歴史博物館の展示のデジタル化（図17）や多言語化のほか、博物館を拠点とした周遊観光に結び付けていこうとするものである。現在、拠点計画に基づき、埴輪の3Dアーカイブ化や常設展示のデジタル化などを進めており、令和3年度はデジタル埴輪展示室（仮称）の整備のほか、県内博物館や資料館、古墳などを周遊するバスの運行、令和6年度には榛名山噴火関連遺跡展示室の整備なども計画している。

これまでの取組により、本県古墳や遺跡に対する関心も高まり、古墳や遺跡を巡るツアーなどの旅行商品が複数の旅行会社で企画されるなど、観光誘客にもつながっている。令和2年春の国内最大級の観光キャンペーン「群馬デスティネーションキャンペーン」の際には、テレビコマーシャルで「古墳王国群馬篇」として大室古墳群（前橋市）などが紹介された。現在は、コロナウイルス感染症拡大の影響から、団体ツアーの実施などの観光誘客の取組は難しい状況ではあるが、着実に群馬の歴史文化遺産への認知度は高まり、ファンも増えていると感じている。

今後も、世界に通用するコンテンツとして「埴輪」



図17 群馬県立歴史博物館と国宝展示室

と「榛名山噴火関連遺跡」を中心に、イベントだけでなく、周遊観光や商品開発など民間事業者や県内市町村と連携した幅広い取組を通じて、本県の貴重な歴史文化遺産の価値や魅力をより多くの方に知っていただき、群馬県＝「古墳大国ぐんま」＝「日本一の埴輪県・埴輪王国ぐんま」として認知度向上と地域の活性化につなげていきたいと考えている。

おわりに

本稿では、群馬県で行っている古墳文化に関する取組について紹介した。古墳総合調査のような基礎的で学術的な調査から、誰でも気軽に楽しんでもらえるような取組など、多方面からのアプローチを行っている。それらが噛み合っこそ、群馬県の大きな文化遺産でもある古墳文化を次世代に継承していくための土台ができ、保存・活用の意識が高まっていくものだと考える。また、実際にこうした取組をとおして群馬県古墳文化への関心は高まっていると感じている。今後とも、取組を継続していきたい。